

総 則

1 高等学校学習指導要領の改訂について ～中央教育審議会答申から～

平成20年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（以下「答申」。）において、「生きる力」をはぐくむという教育の基本理念を、新学習指導要領に継承する必要があることが示された。ここでは、「生きる力」の育成という基本理念が重要視されている経緯を説明した上で、学習指導要領の改訂の基本的な考え方や教育内容に関する主な改善事項について説明する。

(1) 学習指導要領の改訂の経緯

学校において編成される教育課程の基準である学習指導要領は、教育基本法第1条に規定された普遍的な教育の目的の実現を図るため、社会や子どもたちの変化を踏まえ、概ね10年に一度、改訂されてきた。

現行学習指導要領は、平成10年から11年にかけて改訂され、学校週5日制の完全実施と併せて高等学校では15年度から実施された。現行学習指導要領においては、平成元年の学習指導要領改訂の趣旨を更に発展させ、変化の激しい次の時代を担う子どもたちに必要な力は「生きる力」であるとした上で、その「生きる力」をはぐくむために、教育内容の厳選と授業時数の削減、総合的な学習の時間の創設などが示された。

なお、平成15年には学習指導要領の一部改正が行われ、高等学校においても、学習指導要領に示された、すべての生徒に対して指導するものとする内容を確実に指導した上で、個性を生かす教育を充実する観点から、生徒の学習状況などその実態等に応じて、学習指導要領に示していない内容を加えて指導することも可能であるという「学習指導要領の基準性」が明確化された。

(2) 現行学習指導要領の理念（「生きる力」の育成）の重要性

ア 「知識基盤社会」の時代と「生きる力」

平成17年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」においては、21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」（knowledge-based society）の時代であるとし、その特質として、例えば、①知識には国境がなく、グローバル化が一層進む、②知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる、③知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる、④性別や年齢を問わず参画することが促進される、ことなどを挙げている。

平成17年の答申では、さらに、このような社会の変化に対応するために重視される事項として、

- 課題を見だし、解決するための思考力・判断力・表現力等
- 知識・技能の更新のための生涯にわたる学習
- 他者や社会、自然や環境と共に生きること

などを挙げているが、このことは、「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに求め

られている力が、まさに「生きる力」であり、平成8年の中央教育審議会答申での提唱以来、学習指導要領が重視してきた「生きる力」の育成が、ますます必要とされていることを示すものである。

※「生きる力」…「変化の激しい社会を担う子どもたちに必要な力は、基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの『生きる力』である」
(平成8年7月中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」)

イ 学校教育法の一部改正と「生きる力」

平成19年6月に公布された学校教育法においては、教育基本法の改正を踏まえて、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と定められた。(第30条第2項、第49条、第62条等)

この規定によって、学力の重要な要素は、

- ① 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③ 学習意欲

であることが明確に示された。

学校教育法によって示された、こうした教育の基本理念は、現行学習指導要領が重視している「生きる力」の育成にほかならないこと、また、「生きる力」は前述の「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに、今後一層求められるものであることなどから、新しい学習指導要領においても、「生きる力」を育成するという現行学習指導要領の理念は変わらずに引き継がれることとなる。

(3) 学習指導要領改訂の基本的な考え方

「答申」では、学習指導要領の理念(「生きる力」の育成)を実現するための具体的な手立てを確立するという観点から、改訂の基本的な考え方を次のように示した。

学習指導要領改訂の基本的な考え方

- [1] 改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂
- [2] 「生きる力」という理念の共有
- [3] 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- [4] 思考力・判断力・表現力等の育成
- [5] 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
- [6] 学習意欲の向上や学習習慣の確立
- [7] 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

高等学校教育課程を見直すに当たっては、この「学習指導要領改訂の基本的な考え方」や学校教育法の一部改正において改められた高等学校の目的・目標規定などを踏まえ、国民としての素養である基礎・基本を義務教育でしっかりと身に付けることを前提として、高等学校においては、それを発展させ、学問研究や技術の習得に結び付けていくことが重要であるとの観点から、次の3点を特に重視している。

- 各教科・科目において、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、知識・技能を活用する学習活動を重視すること。
- 各教科・科目において、義務教育と高等学校との間の系統性を重視した円滑な接続を図ること。
- 豊かな心や健やかな体の育成のため、道徳教育の充実や健やかな心身の育成についての指導の充実を図ること。

(4) 教育内容に関する主な改善事項

「答申」では、教科・科目ごとの具体的な改善を示す前に、前述の「学習指導要領改訂の基本的な考え方」を踏まえて今回の改訂で充実すべき重要事項や、社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項を整理している。

ア 今回の改訂で充実すべき重要事項

- | | | |
|-----------|-----------|------------------|
| ○ 言語活動の充実 | ○ 理数教育の充実 | ○ 伝統や文化に関する教育の充実 |
| ○ 道徳教育の充実 | ○ 体験活動の充実 | ○ 小学校段階における外国語活動 |

このうち、言語活動の充実については、知識・技能を活用する学習活動において、言語の能力を高めることの必要性が指摘されていることから、各教科等を貫く重要な改善の視点である。各教科等における言語活動の充実を進めるに当たっては、各教科等の指導計画に言語活動を位置付け、授業の構成や進め方自体を改善する必要がある。

イ 社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項

- | | | | |
|--------|--------|---------------------|----------|
| ○ 情報教育 | ○ 環境教育 | ○ ものづくり | ○ キャリア教育 |
| ○ 食育 | ○ 安全教育 | ○ 心身の成長発達についての正しい理解 | |

これらに共通するのは、子どもたちが、社会や自分たちを取り巻く環境の変化の中で、自らの責任を十分自覚した上で、積極的に情報を得て、教科等で得た知識・技能を活用して自分なりに判断し、行動できることが求められている点である。このため、学校は、関連の深い特定の教科等を中心にしつつ教科等を横断して知識・技能を指導するとともに、それらを活用して子どもたちが考えたり、実践しようとするきっかけを与えることが求められている。

なお、これらの課題に取り組むに当たっては、家庭や地域、企業等との連携・協力を進めることも必要である。

以上の学習指導要領の改訂の基本的な考え方等を踏まえて、今後、各学校において、教育課程の見直しを図り、各教科・科目の指導計画等の改善を図る必要がある。その際、各学校においては、PDCAサイクルに基づき、教育課程や指導方法等を不断に見直し、教育活動を充実させるカリキュラム・マネジメントを確立することが必要である。

また、「生きる力」を育成するという学習指導要領の理念の実現のためには、「生きる力」の核となる「確かな学力」をはぐくむ授業の改善はもちろんのこと、生徒を取り巻く環境の変化に対応する能力をはぐくむため、教科等を横断して取り組む「キャリア教育」や「道徳教育」等の充実を図ることが重要である。

2 確かな学力の育成 ～「高等学校学力アッププロジェクト」の成果から～

(1) 北海道高等学校学力等実態調査の活用

本調査は、「国語総合」、「数学Ⅰ」、「英語Ⅰ」について、学習指導要領に示された教科の目標の実現状況を客観的に把握するとともに、調査問題等の作成及び分析を通して、各校における定期テストの質の向上と今後の指導内容や指導方法の工夫改善に役立てることを目的として実施している。

各学校においては、学校別集計結果を活用して、学習指導上の成果や課題を教職員全体で的確に把握し、その後の学習指導や教育課程の編成・実施に反映させることが大切である。

ア 各学校における分析として、次のような方法が考えられる。

(ア) 各科目における「内容・領域別」の分析

各科目の内容・領域別の自校の通過率を、設定通過率や全道の通過率と比較・分析し、それぞれの内容・領域別の定着状況や課題などを把握する。

(イ) 各科目における「評価の観点別」の分析

評価の観点別の自校の通過率を、設定通過率や全道の通過率と比較・分析し、それぞれの達成状況などを把握する。

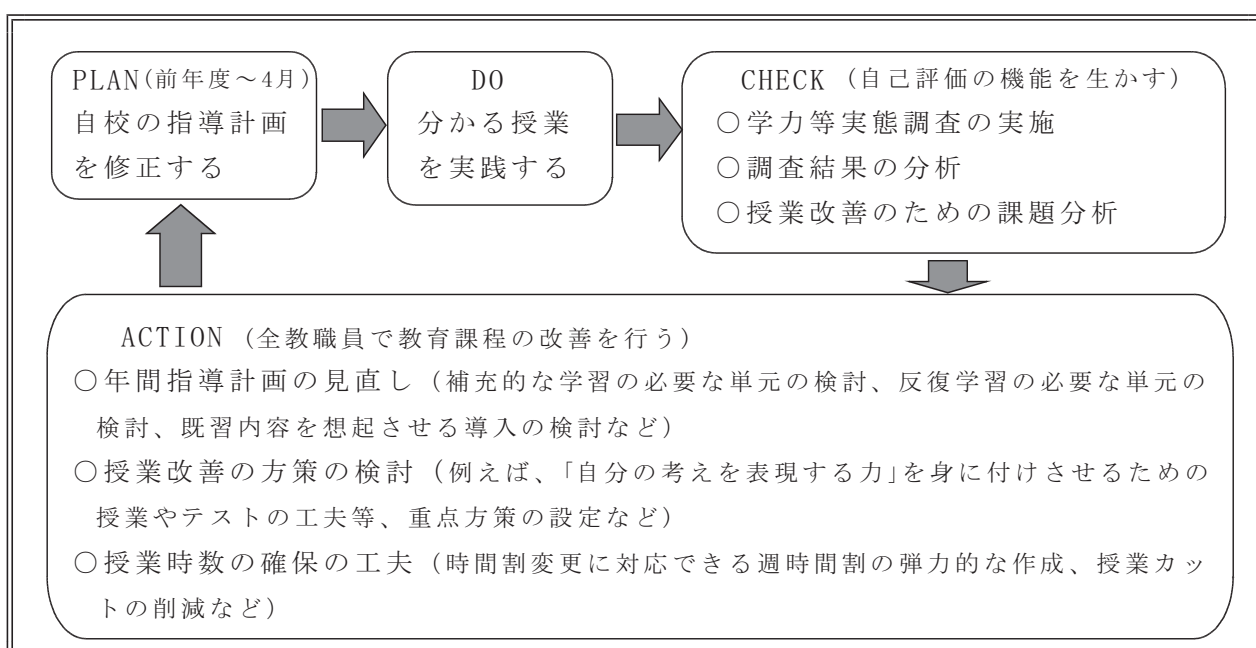
(ウ) 各科目における「設問ごと」及び「項目ごと」の分析

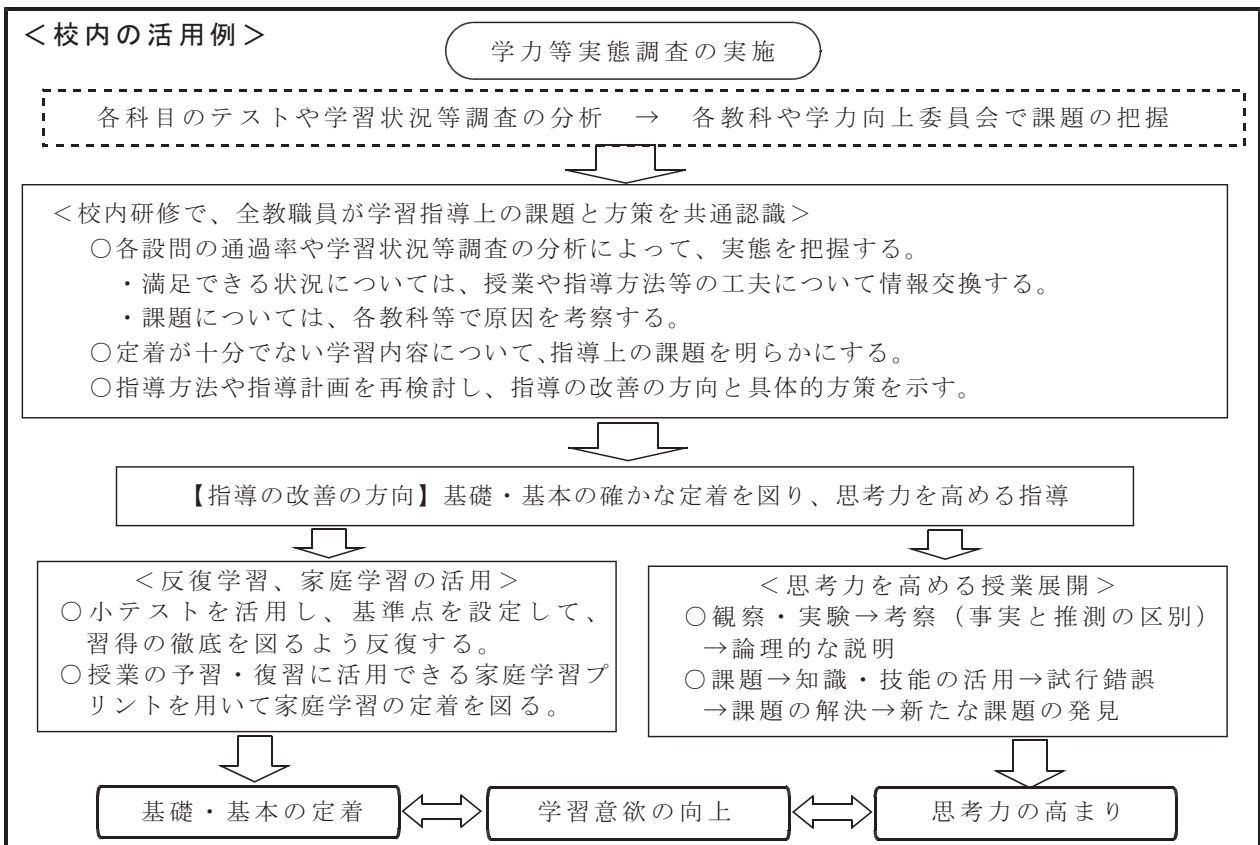
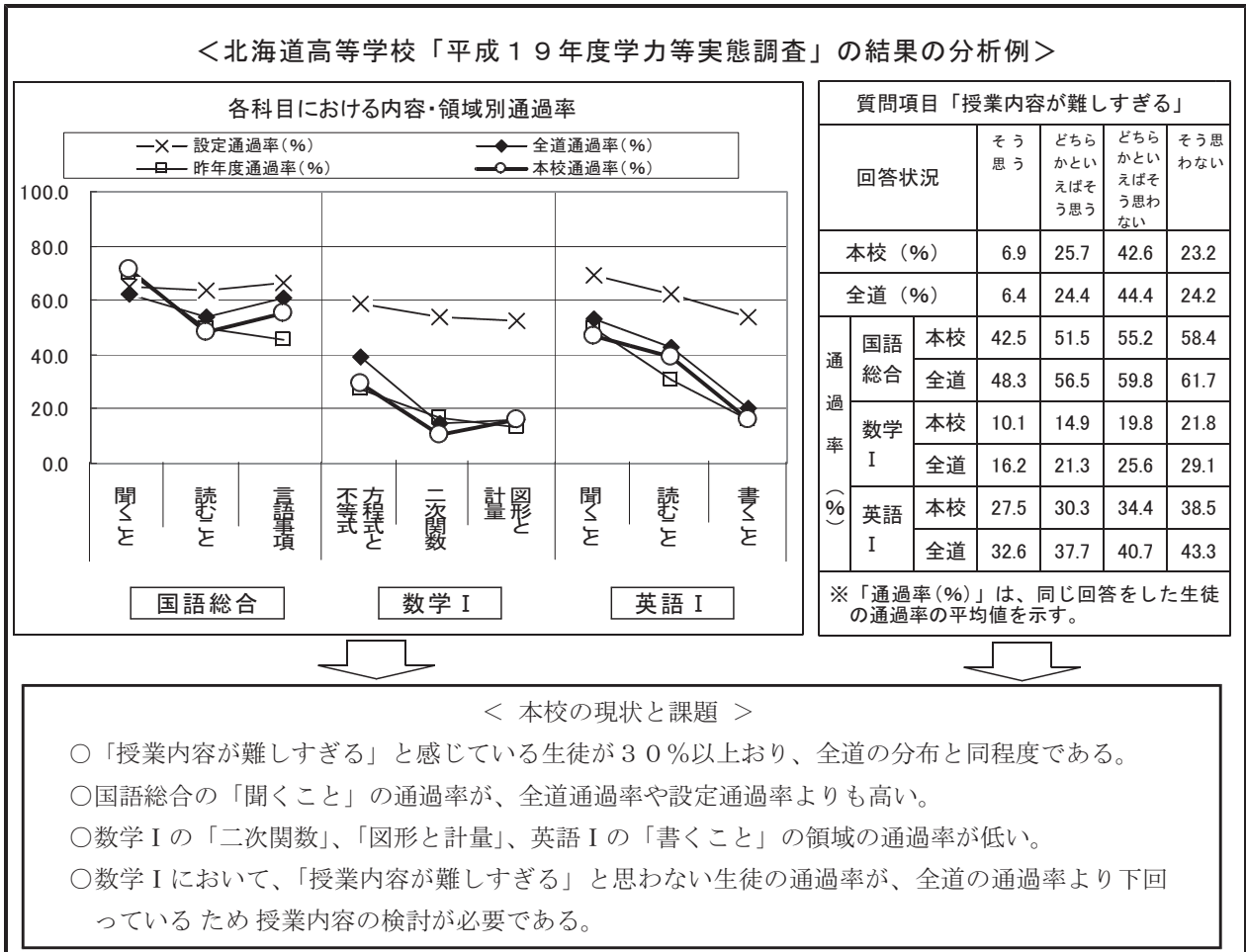
設問ごと及び項目ごとの自校の通過率を、設定通過率や全道の通過率と比較・分析し、それぞれの学習内容の定着状況や課題などを把握する。

(エ) 学習状況等調査の結果の分析

回答状況と各教科の通過率とのクロス集計を、全道の結果と比較・分析して、各教科の学習方法や指導方法等の課題を把握する。

イ 各学校においては、学力等実態調査の結果の分析により、授業改善のための課題を把握し、年間指導計画の見直しや授業改善の方策の検討などを行って、指導計画を修正するなど、次のようなPDCAサイクルが確立するよう取り組むことが望ましい。





(2) 生徒による授業評価の活用

生徒による授業評価は、教員が自らの授業を客観的に評価するための一つの方法であり、指導力の向上や授業の改善を図ることを目的として行うものである。各学校においては、評価結果を基にして校内研修を行うなど、組織的・計画的に授業改善に取り組むことが大切である。

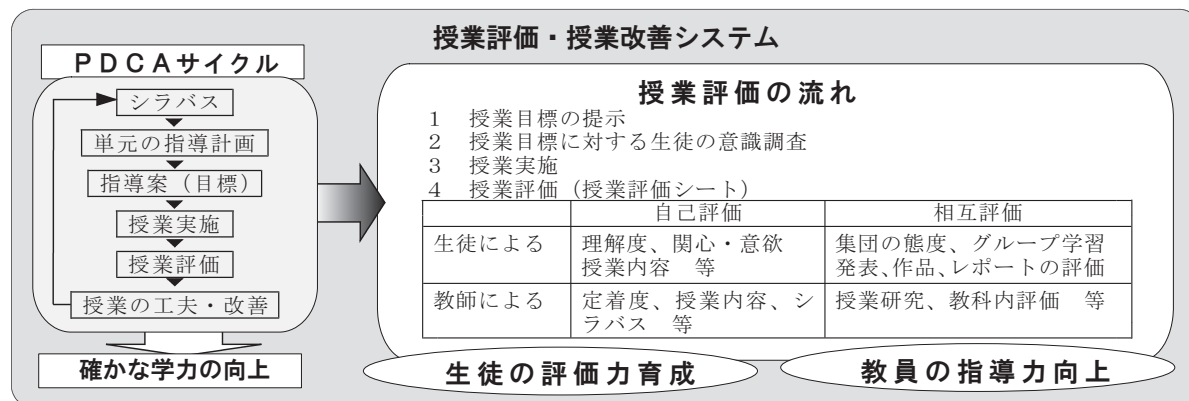
「北海道学力向上推進事業（高等学校学力アッププロジェクト）」の推進校・推進協力校の64校においては、生徒による授業評価を実施しており、評価結果に基づく授業改善を図りながら「確かな学力」を育成するための実践研究に取り組んでいる。

次の実践例は、「授業評価・授業改善システムの構築」を通して、思考力・判断力・表現力を基盤とした「確かな学力」を向上させるための指導方法及び評価方法に関する実践研究に取り組んでいる例である。

● AcademyプロジェクトA 圏域の推進校（B高等学校）における生徒による授業評価に係る実践研究

仮説：生徒による授業評価を、指導計画から評価までの一連のPDCAサイクルに位置付けて実施することにより、具体的な授業改善に役立てるとともに、シラバスの改善にもつなげることができる。このことにより、教員の指導力向上及び生徒の確かな学力の向上が期待できる。

授業改善のためのPDCAサイクルの中の一過程として捉えている、生徒による授業評価についても、単なるアンケートとしないようにするために、「目標管理手法」を用いている。これは、単元の目標についてどれだけ理解したかを生徒自身に評価させることで、授業改善に資するものである。



生徒による授業評価及び教員相互評価の実施
授業評価シート及び教員相互評価シートを使用して、プロジェクト委員会が調査時期等について各教科の要望をもとに計画を立て、各教科・科目ごとに年1回実施する。
※資料1 生徒による授業評価シート ※資料4 教員相互評価の観点の例
CHECK

分析と公表
各授業担当者が授業評価シートを集計して授業評価シート分析用紙にまとめる。自己評価と今後の授業改善の方策などについて、研究紀要等にとりまとめ、公表する。
※資料2 授業評価シート分析用紙
ACTION・PLAN

授業改善の計画・実践
明らかになった課題を解決するための具体的な方策(授業改善の具体的な内容)を確認し、各授業担当者が自己評価と今後の授業改善の方策に基づいた授業を実践する。
※資料3 授業評価シート分析結果
PLAN・DO

生徒の変容の把握
日常的な観察、授業評価シートの分析、学力等実態調査の結果分析などの方法を用いて、
・授業に積極的に参加するクラス全体の雰囲気向上
・各生徒の学習意欲向上
など、授業改善後の生徒の変容を把握し、さらなる授業改善を実践する。
CHECK

生徒による授業評価シート				北海道B高等学校
学年	科目	NCODE	氏名	

■この授業評価は、次の3つを目標としています。

授業評価を通して

- (1) 授業を改善する。
- (2) あなた自身が分かったこと、分からなかったことを明らかにする。
- (3) 物事を分析し、改善方法などを考える力を身に付ける。

*単なる感想や批判ではなく、前向きな意見を、まじめに、根拠をもって記入してください。

授業を受ける前	記入日： 年 月 日
---------	------------

- 1 単元（または本日）の授業目標
教員が記入可。（様々な観点で目標を複数設定。その授業目標を序列化する。）
 授業前に生徒へ配布し、目標を確認させる。

- 2 単元の学習内容について、現在、自分が分かっていること、イメージすることを書いてください。

授業を受けた後	記入日： 年 月 日
---------	------------

- 3 単元の学習内容について分かったこと、分からなかったことを具体的に書いてください。

○○について	分かったこと	分からなかったこと

- 4 3の分かったことについて、いつ、どんなきっかけで分かりましたか。

いつ	
どんなきっかけ	

- 5 3の分からなかったことについて、分からなかった原因は何だと思いますか。

分からなかった原因	
-----------	--

- 10 あなたは、授業を理解するために工夫をしましたか。
 4（よく工夫した）3（工夫した）2（あまり工夫しなかった）1（工夫しなかった）
 → 4（よく工夫した）3（工夫した）と回答した人は、どのような工夫をしましたか。（複数回答可）
 - ①ノート・メモをとった。
 - ②先生だけでなく、クラスメートで内容を確認し合った。
 - ③教えてもらった内容をイメージ化して、図などに表した。
 - ④問題集や参考書を活用した。
 - ⑤その他（自分なりの工夫があればその内容を具体的に記入してください）

- 11 授業の先生の説明・板書・プリントなどが工夫されていましたか。
 4（大変よかった）3（よかった）2（あまりよくなかった）1（よくなかった）

- 12 授業の進む速さはあなたにとっていかがでしたか。
 4（最適であった）3（適切であった）2（速すぎた）1（遅すぎた）

- 13 授業に関して、担当の先生に要望があれば記入してください。

※資料2 生徒による授業評価シート分析用紙

生徒による授業評価シート分析用紙

北海道B高等学校

学年・組	年	組	科目	担当者
------	---	---	----	-----

この用紙は、生徒から回収した授業評価シートを分析するために用います。それぞれの項目について集計し、生徒の回答の多かったものなどについて分析及び考察した上で、先生方の授業の改善につなげてください。

授業開始日	年	月	日
授業終了日	年	月	日

- 1 単元（または本日）の授業目標（ご自分で教えたかった内容）
- 2 単元の学習内容について、授業を受ける前に生徒が、分かっていること、イメージすること
- 3 単元の学習内容について、生徒が分かったこと、分からなかったこと
- | | | |
|--------|--------|-----------|
| ○〇について | 分かったこと | 分からなかったこと |
|--------|--------|-----------|
- 4 ③の生徒が分かったことについて、いつ、どんなきっかけで分かったか
- | | |
|---------|--|
| いつ | |
| どんなきっかけ | |
- 5 ③の分からなかったことについて、生徒が分からなかった原因
- | | |
|-----------|--|
| 分からなかった原因 | |
|-----------|--|

10で、4（よく工夫した）、3（工夫した）と回答した生徒は、どのような工夫をしたか。生徒の回答が多かったものに○を付ける。

項目	回答数
① ノート・メモをとった	
② 先生だけでなく、クラスメートで内容を確認し合った	
③ 教えてもらった内容をイメージ化して図などに表した	
④ 問題集や参考書を活用した	

⑥ その他はその内容を具体的に記入願います。

11 担当教師の説明、板書、プリントなどが工夫されていたか。

項目	回答数	割合(%)	割合から考察できること
4 大変よかった			
3 よかった			
2 あまりよくなかった			
1 よくなかった			

12 授業の進む速さは生徒にとってどうであったか

項目	回答数	割合(%)	割合から考察できること
4 最適だった			
3 適切だった			
2 速すぎた			
1 遅すぎた			

13 授業に関する生徒の要望

--

14 授業評価シートの分析を通して、下の表にまとめて記入してください。

参考になると思われる生徒からの意見	今後の授業改善のための方策
分析を通じた自己評価	

※資料3 授業評価シート分析結果（資料2の14から）
〔国語 古典〕

参考になると思われる生徒からの意見	今後の授業改善のための方策
<ul style="list-style-type: none"> ・古典嫌いや苦手意識を克服したい。 ・毎時間配られる、段落まとめプリントが有効。 ・単元目標や毎時間の目標を提示してほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回のように、毎時間積極的な発問を投げかけ、生徒に考えさせる授業づくりを心がける ・身近な生活との関連を意識した指導内容を検討する。
分析を通じた自己評価	<ul style="list-style-type: none"> ・講義形式だけではなく、生徒が参加していると実感できるよう、1単元に1回はグループ学習やペア学習を行ったことがよかった。 ・板書を工夫することで、生徒の興味・関心を高めることができた。 ・古典嫌いや苦手意識を払拭するために、生徒の生活と関連した身近な例を提示することで、理解を深めさせることができると考える。

〔理科 生物〕

参考になると思われる生徒からの意見	今後の授業改善のための方策
<ul style="list-style-type: none"> ・プリント学習が有効であるという多数の意見がある一方で、不要だという意見もある。 ・進捗や定着の度合いについての意見は二極化している。 ・板書方法についての意見あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントの内容や構成について、さらに工夫を重ねる。 ・限られた時間の中での内容吟味など、教材の精選に努める。 ・自分本位であったと思われる面の改善を図る。
分析を通じた自己評価	<ul style="list-style-type: none"> ・机間指導をこまめに行ったが、十分ではなかった。 ・授業に集中していない生徒への指導方法を工夫する必要がある。 ・年間を通して、ノートが1冊の参考書になるようにノート指導をしてきたが、細部までの配慮（ノートに貼りやすいプリントを用意するなど）が欠けていた。

〔保健体育 体育〕

参考になると思われる生徒からの意見	今後の授業改善のための方策
<ul style="list-style-type: none"> ・武道は好きではないし、他人にけがをさせたくない。 ・寝技をもっと知りたい。 ・聞き逃したり見逃したりするとできなくなってしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・苦手な生徒に対する対応として、種目ごとの工夫が必要である。 ・生徒が質問できる機会をつくる。 ・意欲的、主体的な集団に対応した学習内容を工夫する。
分析を通じた自己評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどの生徒が意欲的で主体的に授業に参加することができた。 ・安全で楽しく取り組むための指導が徹底できたことが、単元目標がほぼ達成できた要因となった。 ・今後も生徒が求めていることや発達段階の把握に努め、一人一人の生徒に効果的で分かりやすい指導方法を工夫する。 ・どの単元においても、運動が苦手な生徒でも楽しんで取り組むことができる指導方法を工夫する。

※資料4 教員相互評価の観点の例
（英語）

	項目	小項目	評価
1	授業のねらいが明確である。	生徒にもねらいが提示されているか。	
2	できるだけ英語で授業を進めている。	①教師が積極的に使用しているか（アイコンタクトを含む）。 ②生徒の理解できるレベルの英語か。 ③生徒にクラスルームイングリッシュを使わせているか。	
3	日本語訳（逐語訳）をむやみに生徒に求めない。	逐語訳に多くの時間を使うより、生徒に英語を使わせる時間を多く取っているか。	
4	英語についての説明は最小限にし、指導者が常に英語でモデルを示している。	①文法・語法等の説明は必要だが、あくまでもcommunicationの視点に立って端的に行っているか。 ②その説明に加えて具体的な使用場面における英語の例示をしているか。	
5	教えたことをすぐに生徒に使わせる場を与えている。	目標となる表現を含む英文を生徒が自ら再生したり、その表現を使って身近なことを表現する活動があるか。	
6	生徒が英語を使ってcommunicationする場面を設定している。	5での表現の習熟を図るために、生徒が自分の身近な場面において、その表現だけでなく、それを活用した情報のやり取りができる場を与えているか。	
7	学習が遅れがちな生徒への配慮がなされている。	①苦手意識のある生徒に英語が使えることを実感させているか。 ②個別活動時に確認とフォローを。	

（評価 5：大変良い 4：良い 3：普通 2：あまり良くない 1：良くない）

3 キャリア教育の一層の充実

(1) キャリア教育とは

平成18年11月に文部科学省が作成した「小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引－児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために－」においては、「キャリア教育」の定義を次のようにまとめた。

<p>キャリア教育とは</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>「キャリア概念」に基づいて、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」。端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」 (キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書(平成16年1月28日))</p> </div> <p>※「キャリア」とは…個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積。 ※「キャリア発達」とは…発達とは生涯にわたる変化の過程であり、人が環境に適応する能力を獲得していく過程である。その中で、キャリア発達とは、自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程である。</p>

また、国立教育政策研究所生徒指導研究センターにおいては「キャリア発達にかかわる諸能力」(社会人・職業人として生きていくために必要な能力や態度、資質)として、次の4つの能力を例示している。これらの能力は、学校の教育活動全体を通してはぐくんでいく必要があり、各学校においては校内体制の構築を図るとともに全体的な指導計画を作成し、各能力の調和のとれた育成に努めることが大切である。

キ ャ リ ア 発 達 に か か わ る 諸 能 力			
領 域	能 力	領 域	能 力
人間関係形成能力	自他の理解能力	情報活用能力	情報収集・探索能力
	コミュニケーション能力		職業理解能力
将来設計能力	役割把握・認識能力	意思決定能力	選択能力
	計画実行能力		課題解決能力

(国立教育政策研究所生徒指導研究センター 平成14年11月)

(2) 「高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究」事業

大学等への進学者が多い普通科において、無目的に「入れる」大学、学部・学科を選択して「入った」学生が、学業や生活に適応できなかつたり、厳しい就職等の状況を克服できなかつたりしている状況がある。これまでのキャリア教育は、職業学科を設置している学校が先進的に推進してきたが、これからは普通科にあっても、生徒が進学希望であるか就職希望であるかを問わず、将来の生き方にかかわる問題として、生徒が将来への夢や希望をはぐくみ、その実現に努力する指導・援助として、キャリア教育に取り組むことが大切である。

こうしたことから、国においては、普通科におけるキャリア教育を充実するため、平成19年から「キャリア教育の在り方に関する調査研究」事業を実施しており、本道においては、普通科の6校が推進校として、この調査研究に取り組んでいる。

本事業を推進している普通科のC高等学校では、学校全体の教育活動を通してキャリ

ア教育を推進するため、「キャリア教育推進委員会」を設けて、すべての教員が方針や内容を十分に理解し、各分掌間の有機的な意思疎通を図り、キャリア教育プログラムを実施している。

また、全体的な指導計画として、学年ごとに「進路ストーリー」を作成している。各学年のこうした計画に基づき、生徒の発達段階に応じ、自己と社会との関係を適切に位置付け、各発達段階における発達課題を達成できるようキャリア教育に取り組んでいる。

● 北海道C高等学校（普通科）におけるキャリア教育の取組

- 1 ねらい
生徒が地域の人や環境、産業とのかかわりから、自己の在り方生き方について考え、望ましい勤労観・職業観を
はぐくむ中で、将来の目標をかなえるための取組を行う。
- 2 組織体制づくり
進路指導部が主体となってキャリア教育推進委員会を設置し、学校内外との連携を図っている。
- 3 全体的な指導計画の作成
キャリア教育推進委員会がキャリア教育に係る全体的な指導計画を示し、各学年における進路指導の到達目標や
具体的指導内容、他の教育活動との関連付け、他の教育活動との関連を明確にしている。
- 4 取組の特徴
(1) 中学校と連携型中高一貫教育を推進し、中高6年間の系統的キャリア教育実践プログラムに取り組んでいる。
(2) 北海道高等学校学力アッププロジェクト「Academyプロジェクト」推進協力校として、学力向上と連動した取
組を行っている。
- 5 進路ストーリー（第1学年）の一部

月	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
行事	文化祭	夏季休業	期末 考查	秋季 休業		中間 考查	冬季休業		期末 考查	
キャリア教育プログラム・第1学年・31時間	解を深める ①自己紹介ゲーム ①基礎面接 ①自己理解	職業知識の幅を広げる ②職業人インタビュー ②職業人インタビュー発表会 ②社会人講演会 ②進路室ガイダンス ④職業研究Ⅰ ④職業研究Ⅱ			職業に就く過程を研究する ②進路別ガイダンス ③公開面接 ③ライフプランⅠ ③ライフプランⅡ ③3年生と語る会 ③ライフプランⅢ			自分の考えを伝える ③先輩の講話 ④総合面接 ④個人カルテ整理		
	1h 2h 2h	2h 2h 2h 1h 1h 1h			2h 2h 1h 1h 2h 1h			1h 4h 1h		
		個人面談／職業意識 家庭訪問・家庭理解			進路希望の明確化			個人面談／進路希望		
	オープンキャンパス	進学相談会						進学相談会		
学力向上	夏季休業課題 20 Days Trial	基礎 学力 考查	課題 1 Week Trial	第2回基 礎力診断 テスト	診断 結果 返却	冬季休業課題 20 Days Trial				

※表中の①～④は下の表「6 1年次における具体的な取組の一部」の領域の①～④を示している。

6 1年次における具体的な取組の一部

領域	①人間関係形成能力	②情報活用能力	③将来設計能力	④意思決定能力
1年次における具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ○「自己紹介ゲーム」 宿泊研修に設定した時間において、客観的に自己をとらえるため、他者から見た自分像を聞く。 ○「基礎面接」 個人カルテを活用した面接を行うことにより、人間関係の大切さを理解する。 ○「自己理解」 4月に実施したレディネステストの分析結果を基に自己理解シートを作成し、自己の適性や職業意識について確認し、他者との関係の中で自己理解を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「職業人インタビュー」 夏休みの課題として、働くことについて、身近な大人に聞き取り調査を行う。 ○「職業人インタビュー発表会」 働くことというテーマで調べたことについて、自分の考えを交え、発表する。 ○「社会人講演会」 社会で活躍する職業人を招き、その職業の特性を理解し、進路選択に役立てる。 ○「進路室ガイダンス」 進路室の活用方法を学ぶ。 ○「進路別ガイダンス」 上級学校等の情報を学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「公開面接」 3年生の面接を見学し、自己の生き方を考える。 ○「ライフプランⅠ・Ⅱ・Ⅲ」 進路計画の意義について理解し、自己の目標達成に向けたアクションプランを作成し小グループの中で発表する。 ○「3年生と語る会」 進路分野別に小グループに分かれ、3年生と語ることにより、自己を活かせる生き方や進路を現実的に考える。 ○「先輩の講話」 進路を決定した先輩から体験談を聞くことにより、今取り組むべきことを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「職業研究Ⅰ・Ⅱ」 職業に就くための手段や方法の実際を学ぶことにより、多様な選択肢について比較検討する。 ○「総合面接」 1年間の自己の成長について、面接で相手に伝えることにより、課題に積極的に取り組み主体的に解決しようとする意欲を高める。 ○「進路カルテ整理」 1年間の資格取得や成績等の情報を個人カルテに整理しまとめることにより、自己の課題の明確化を図り、次の場面に活かそうとする意欲を高める。

4 道徳教育の充実

(1) 答申に示された改善の基本方針

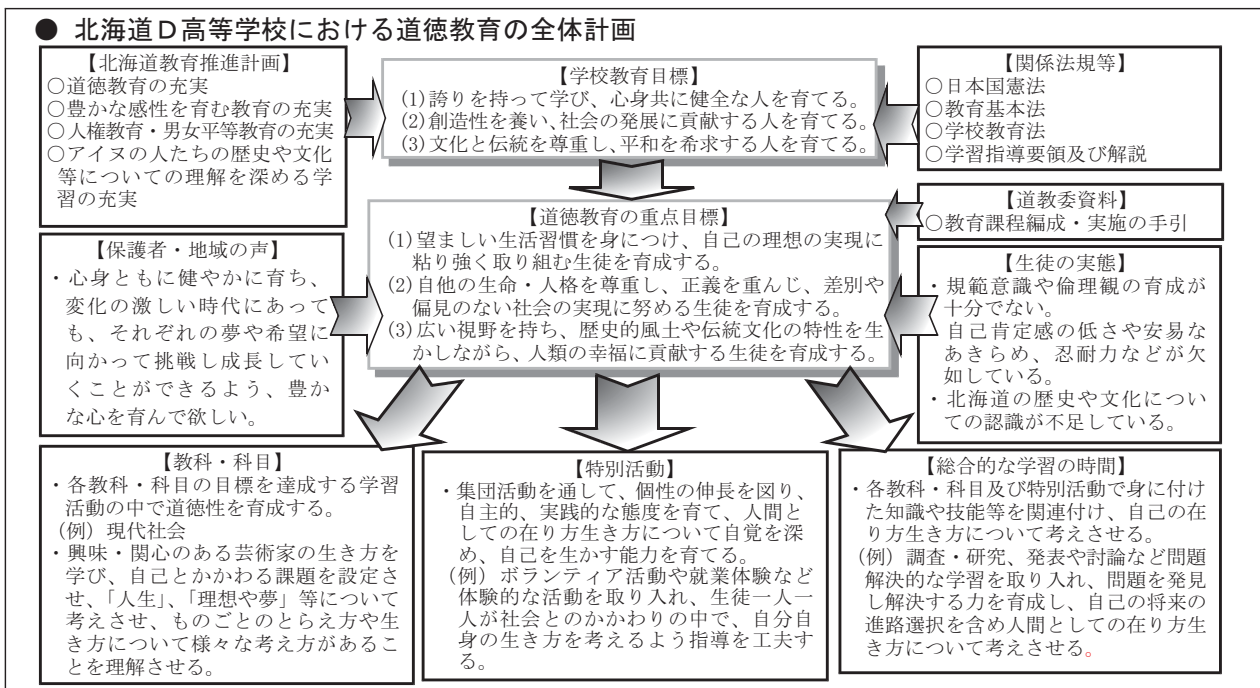
ア 道徳教育については、下記の課題を踏まえ、小・中・高等学校の道徳教育を通じ、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を培い、自立し、健全な自尊感情をもち、主体的、自律的に生きるとともに、他者とかかわり、社会の一員としてその発展に貢献することができる力を育成するために、その基盤となる道徳性を養うことを重視すること。

イ 社会の急激な変化に伴い、人間関係の希薄化、規範意識の低下が見られる中で、高等学校でも、知識等を教授するにとどまらず、その段階に応じて道徳性を養い、人間としての成長を図る教育の充実を進めること。

<課題> 高等学校の道徳教育は、在り方生き方に関する教育を教育活動全体を通じて行うこととされているが、そのことを意識した指導が十分にはなされていないとの指摘がある。

(2) 答申に示された改善の具体的事項

- 指導内容については、子どもの自立心や自律性、生命を尊重する心の育成をいずれの段階においても共通する重点として押さえるとともに、基本的な生活習慣、規範意識、人間関係を築く力、社会参画への意欲や態度、伝統や文化を尊重する態度などを育成するといった観点から、学校や学年の段階ごとに取り組むべき重点を示すこと。
- 高等学校のすべての教育活動を通じて道徳教育が効果的に実践されるようにするため、学校としての指導の重点や方針を明確にし、道徳教育の全体計画の作成を必須化するとともに、各教科や特別活動、総合的な学習の時間がそれぞれの特質を踏まえて担うものについて明確にすること。
- 生徒が人間としての在り方生き方にかかわる問題について議論し考えたりしてその自覚を一層深めるようにする観点から、中核的な指導場面となる「倫理」や「現代社会」（公民科）、「ホームルーム活動」（特別活動）などについて内容の改善を図ること。各学校においては、前述の基本方針や改善の基本的事項を参考に計画を作成する必要がある。次の実践例は、道徳教育の重点目標を明確にした道徳教育の全体計画である。



次の実践例は、教科・科目や特別活動、総合的な学習の時間において取り扱う道徳教育の内容項目を整理し、道徳教育の年間指導計画に位置付けたものである。

● 北海道E高等学校における道徳教育年間指導計画の実践例

平成20年度 道徳教育年間指導計画（1学年）

番号	実施日	実施内容	教育課程上の位置付け	道徳の内容項目																			
				自分自身				他人とのかかわり				自然とのかかわり				社会とのかかわり							
				基本的生活習慣	自主・自律	理想の実現	個性の伸長	礼儀作法	感謝・思いやり	友情・信頼	異性理解	寛容・謙虚	自然への畏敬	生命の尊重	生きる喜び	権利と義務	公徳心	公正・公平	勤労奉仕	家族愛	愛校心	先人への感謝	伝統の理解
1	4月10日	対面式・新入生オリエンテーション	学校行事	○	◎				○	○													
2	4月11日	学習・生活ガイダンス	HR活動	◎	○	◎	○											○					
3	4月24日	宿泊研修事前準備	学校行事	◎	◎				○	○	○						○	○				○	○
4	5月14日	宿泊研修（3日間）	学校行事	○	○				○	○	○						◎	◎				○	○
5	6月17日	赤ちゃんふれあい体験①	家庭・保体			○										◎	◎				◎		
11	8月21日	介護体験	家庭科						○	◎		○			○	◎				○	○		
12	9月11日	特別支援学校との相互交流①	生徒会活動		○					○	◎		○				○						
13	10月23日	健康講話（性教育）	学校行事		○	○				○	○	◎			◎	○				○			
14	11月5日	就労体験（3日間）	総合的な学習の時間		○	◎		◎					○			○				○			
15	1月22日	進路講演会（進学・就職）	HR活動				○	◎	○							◎	○						
16	2月17日	助産婦による講話	保健体育科			○				○	○	○		◎	◎	○	○	○		○			
17	3月23日	アイヌ文学鑑賞	国語科			○					○		○	○	○						◎	◎	○

・「道徳の内容項目」を、「自分自身」「他人とのかかわり」「自然とのかかわり」「社会とのかかわり」の4つに分類した上で、それぞれの内容項目をさらに細分化し、各取組の中で、道徳的な視点から、身に付けさせたい内容項目を○で示した。
 ・各取組において、身に付けさせたい「道徳の内容項目」のうち、特に、重要視する項目については◎で示した。

次の実践例は、上記の年間指導計画に基づいた指導計画の例である。ここでは、上記の中から3項目を取り上げ、◎の項目について指導する上でのポイントのみを掲載した。

宿泊研修（奉仕活動）※3日目のみ記載

○ねらい
 公共の場で多くの人たちに利用される掲示板の修理や登山道の清掃等を通して、思いやりの気持ちや勤労奉仕の態度、公徳心を涵養する。

○内容
 ・奉仕委員長から全体説明
 ・奉仕活動（掲示板の修理、登山道の清掃）
 ・活動の振り返り

特別支援学校との相互交流（6時間配当）

○ねらい
 障害のある児童生徒との交流及び共同学習を通して、障害のある児童生徒との相互理解を促進し、社会を構成する様々な人々と共に助け合い支え合って生きていくことの大切さを考えさせる。

○内容
 ・校内で特別支援学校生徒の作品展を開催
 ・本校の学校祭への特別支援学校の児童生徒の招待及び本校生徒との交流
 ・特別支援学校の運動会における特別支援学校の児童生徒に対する支援及び交流

赤ちゃんふれあい体験（4時間配当）

○ねらい
 赤ちゃんとのふれあいや、その両親へのインタビューを通して、命の尊さや子どもを生き育てることの喜びと責任を学ばせるとともに、家族愛の素晴らしさを実感させる。

○内容
 ①事前指導（オリエンテーション、班分け、赤ちゃんのお母さんへの質問事項作成など）
 ②妊婦疑似体験（妊婦の身体の変化や生活上の困難さについての理解、赤ちゃんふれあうときのマナーについての理解、赤ちゃん人形を使用した抱っこ練習など）
 ③赤ちゃんふれあい体験（赤ちゃん抱っこ体験、お母さんへのインタビューなど）
 ④事後指導（まとめの作成、母子への生徒の感想を含めた礼状の作成と写真の郵送など）

○その他（協力者）
 ・月齢6から10か月の乳児と母親・父親
 ・〇〇町保健所保健師

5 北海道公立高等学校平成20年度入学生教育課程編成の状況

○資料1

「学校設定教科・科目」の設置状況（全日制・定時制）

	教科数	科目数	設置校数	設置学科数
平成20年度	26	508	205	305
平成19年度	25	495	202	305

※ 「教科数」は届出済教科のみ。「科目数」には届出予定科目を含む。

○資料2

「学校外における学修の単位認定」の状況

	大学・高専等における学修	技能審査等の成果	ボランティア活動等の学修
全日制課程普通科	17校	54校	10校
全日制課程総合学科	3校	6校	2校
全日制課程専門学科	7校	44校	7校
定時制課程普通科	3校	17校	6校
定時制課程専門学科	2校	14校	2校

○資料3

「類型を設定している学校（全日制）」の状況

	第1学年から	第2学年から	第3学年から
普通科	8校	59校	35校
専門学科	5校	23校	3校

○資料4

「履修と修得を分離している学校」の状況

	全日制課程普通科	全日制課程総合学科	全日制課程専門学科	定時制課程普通科	定時制課程専門学科
校数	55校	10校	29校	10校	9校

○資料5

「学期の区分ごとの単位修得の認定を行っている学校」の状況

	全日制課程普通科	全日制課程総合学科	全日制課程専門学科	定時制課程普通科	定時制課程専門学科
校数	25校	6校	8校	7校	7校

○資料6

「2学期制を実施している学校」の状況

	平成20年度	平成19年度	平成18年度	平成17年度
全日制課程	196校	197校	203校	198校
定時制課程	34校	39校	42校	41校